

令和7年9月1日

農推第1343-5号

## 病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

| 目次                                               | ページ   |
|--------------------------------------------------|-------|
| 特に発生に注意(9月)【ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)、野菜類・花き類:シロイチモジヨトウ】 | 1     |
| 病害虫の発生予報(9月)                                     | 2     |
| 水稲                                               | 3~4   |
| 野菜【なす、きゅうり、野菜類・花き類】                              | 4~9   |
| 果樹【ぶどう、みかん、果樹類】                                  | 9~13  |
| 花き【さく】                                           | 13~14 |
| その他注意すべき病害虫【スクミリンゴガイ、トマトキバガ、クビアカツヤカミキリ】          | 14~15 |

## 特に発生に注意(9月)

## ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマ成虫



えそ条斑病の被害葉

## 特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が拡大して癒合し、葉が萎凋・枯死することがある。

## 防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック(アザミウマ類)、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 野菜類・花き類:シロイチモジヨトウ



幼虫

## 特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

## 防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎなど)、グレーシア乳剤(ねぎなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

次回の情報は9月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

## 病害虫の発生予報(9月)

| 作物名     | 病害虫名                   | 予想発生量(9月)        |
|---------|------------------------|------------------|
| 水稲      | 紋枯病                    | やや少ない            |
|         | トビイロウンカ                | 平年並              |
|         | 斑点米カメムシ類               | 平年並～ <b>やや多い</b> |
| なす      | うどんこ病                  | やや少ない            |
|         | アザミウマ類                 | 平年並～ <b>やや多い</b> |
| ねぎ      | <b>ネギアザミウマ(えそ条斑病)</b>  | <b>多い</b>        |
| きゅうり    | べと病                    | 平年並              |
|         | うどんこ病                  | 平年並              |
|         | 褐斑病                    | 平年並              |
|         | ミナミキイロアザミウマ<br>(黄化えそ病) | 平年並～ <b>やや多い</b> |
|         | コナジラミ類(退緑黄化病)          | <b>やや多い</b>      |
| 野菜類・花き類 | <b>シロイチモジヨトウ</b>       | <b>多い</b>        |
|         | ハスモンヨトウ                | 平年並～ <b>やや多い</b> |
|         | オオタバコガ                 | 平年並～ <b>やや多い</b> |
|         | コナガ                    | 平年並              |
|         | アブラムシ類                 | <b>やや多い</b>      |
| ぶどう     | べと病                    | 少ない              |
|         | 褐斑病                    | やや少ない            |
|         | 晩腐病                    | やや少ない            |
|         | 黒とう病                   | 平年並              |
|         | チャノキイロアザミウマ            | 平年並～ <b>やや多い</b> |
|         | フタテンヒメヨコバイ             | 平年並              |
|         | ハダニ類                   | <b>やや多い</b>      |
| みかん     | そうか病                   | <b>やや多い</b>      |
|         | 黒点病                    | 少ない～やや少ない        |
|         | ミカンハダニ                 | 平年並～ <b>やや多い</b> |
|         | ミカンサビダニ                | 平年並              |
|         | カイガラムシ類                | <b>やや多い</b>      |
| 果樹類     | 果樹カメムシ類                | やや少ない            |
| きく      | 黒斑病・褐斑病                | 平年並              |
|         | アザミウマ類                 | <b>やや多い</b>      |

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

# 水稲

## 紋枯病



紋枯病発病株

### 特徴

- ◆ 水際の葉鞘部分に楕円形の病斑ができる。
- ◆ 病原菌は糸状菌の一種で、高温(28～32℃)、多湿時に多発する。
- ◆ 品種としては、キヌヒカリは本病にやや弱いので注意する。

### 防除のポイント

- ◆ チッソ肥料の過用、遅い追肥、密植は避ける。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、モンガリット粒剤などを散布する。

#### ※注意！

モンガリット粒剤の水稲における使用時期は「収穫30日前まで」なので注意する。

## トビイロウンカ



成虫



幼虫

### 特徴

- ◆ 6月下旬～7月上旬の梅雨時期に中国大陆から長翅型成虫(飛来世代)が日本に飛来する。
- ◆ 水田に着地したトビイロウンカは分けつ期のイネの株元に住み着き、茎の表面に産卵する。
- ◆ 卵は1週間ほどでふ化し、幼虫(第1世代)は親と同じくイネの株元で、その師管液を吸汁して成長する。その後、数回の脱皮を経て成虫となる。第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れ症状が生じる。

### 防除のポイント

- ◆ トビイロウンカは稲の株元(水際)に生息するので、稲の株元を叩くなどして発生しているかを確認する。
- ◆ 発生が見られたら、エクシードフロアブル(ウンカ類)、エミリアフロアブル(ウンカ類)などを散布する。



坪枯れ症状

「水稲 トビイロウンカの防除 改訂版 R6.7」もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tobiirounka\\_osaka.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tobiirounka_osaka.pdf)

## 斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメ  
(イネホソミドリカスミカメ)

## 特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。



ホソハリカメムシ

基部斑点米や不稔米被害を起こす  
イネカメムシに要注意！！



イネカメムシ

防除情報「イネカメムシの発生を確認しました」  
(令和7年7月17日発出)もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507\\_r7bojo03\\_inekamemushi\\_soshin.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507_r7bojo03_inekamemushi_soshin.pdf)

令和7年7月31日発出の注意報第2号  
「斑点米カメムシ類」もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2508\\_chuuihou02hantenmaikamemushirui\\_soshin.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2508_chuuihou02hantenmaikamemushirui_soshin.pdf)

## 防除のポイント

- ◆ 出穂前後10日以内の畦畔除草は斑点米カメムシ類を水田に追い込むため行わない。
- ◆ 水田内のノビエやイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の増殖源となることから、除草する。
- ◆ 穂揃期(出穂すべき穂のうち7割から8割が出穂している時期)にスタークル/アルバリン粒剤(カメムシ類)、トレボン乳剤(カメムシ類)等を根元まで届くように散布する。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布する。
- ◆ イネカメムシは他の斑点米カメムシ類より早めの開花直後から加害を開始するため、出穂期に薬剤散布を実施する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 野菜

## なす

## うどんこ病



被害葉

## 特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

## 防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パルミノ、パンチョTF顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## アザミウマ類

ミナミキイロ  
アザミウマ成虫※

## 特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。

## 防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、モベントフロアブル、アグリメック、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 露地栽培では、天敵昆虫の温存を図るため、ソルゴー囲い込み栽培などを行う。

## きゅうり

## べと病



被害葉＊

## 特徴

- ◆ 気温20～24℃で発生が多い。
- ◆ 下位葉に葉脈で囲まれた黄色角形の病斑ができ、上位葉へ拡大する。

## 防除のポイント

- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 施設栽培では換気に注意し、結露を避ける。
- ◆ 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- ◆ 発生を認めたら、プロポーズ顆粒水和剤、ベトファイター顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## うどんこ病



被害葉＊

## 特徴

- ◆ 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- ◆ 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- ◆ はじめ株の下位葉に小麦粉をかけたような病斑ができる。しだいに上の葉に広がり、葉面全体が白色の粉を振りかけたようになる。

## 防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にする。
- ◆ 被害葉を除去し、通風を良くする。
- ◆ 発生を認めたら、アフエットフロアブル、トリフミン水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 褐斑病



被害葉

### 特徴

- ◆ 高温、多湿の施設栽培で発生が多い。
- ◆ 天井フィルムからの結露水のボタ落ちで発病が助長される。
- ◆ はじめ葉に円形・褐色の小型病斑を生じ、やがて灰褐色の5～10mm程度の不規則な病斑になる。多湿条件では病斑上に黒褐色のカビが生える。

### 防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にし、多湿にならないよう注意する。
- ◆ 被害葉・老化葉は早めに除去する。
- ◆ 発生を認めたら、カンタスドライフロアブル、ニマイバー水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## ミナミキイロアザミウマ(黄化えそ病)



ミナミキイロアザミウマ被害葉※

### 特徴

- ◆ アザミウマの発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマがMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬し、キュウリ黄化えそ病が発生する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。

### 防除のポイント

- ◆ 施設の開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ ミナミキイロアザミウマの発生を認めたら、アフーム乳剤、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 黄化えそ病の発病株はほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



黄化えそ病被害葉※

## コナジラミ類(タバココナジラミ:退緑黄化病)



タバココナジラミ※

## 特徴

- ◆ タバココナジラミやオンシツコナジラミが加害する。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量も減少する。
- ◆ タバココナジラミがCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬し、キュウリ退緑黄化病が発生する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。
- ◆ キュウリ退緑黄化病と黄化えそ病は見た目で見分けることは困難である。



成虫※

## 防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底するとともに、感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ コナジラミ類の発生を認めたら、アファーム乳剤、グレース乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



退緑黄化病被害株※

## 野菜類・花き類

## ハスモンヨトウ



幼虫

## 特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

## 防除のポイント

- ◆ 発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤(さといも、さといも(葉柄)、オクラなど)、プレオフロアブル(さといも、なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫防除情報「チョウ目害虫に注意！」(令和7年7月9日発出)もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507\\_r7bojo02\\_choumoku\\_soshin.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2507_r7bojo02_choumoku_soshin.pdf)

## オオタバコガ



幼虫



卵

## 特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

## 防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。

病害虫発生予察注意報第1号「オオタバコガ」(令和7年5月15日発出)もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2505\\_r7chuuihou01\\_ootabakoga\\_soshin.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2505_r7chuuihou01_ootabakoga_soshin.pdf)

## コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

## 特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

## 防除のポイント

- ◆ 発生初期に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤(キャベツ、こまつななど)、ディアナSC(キャベツ、非結球あぶらな科葉菜類(こまつな、チンゲンサイ、なばな類を除く)など)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## アブラムシ類



ワタアブラムシ※

## 特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、トランスフォームフロアブル(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこしなど)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 果樹

## ぶどう

## ※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない、等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

## ベと病



葉裏の症状

## 特徴

- ◆ 雨が続くとまん延しやすい。

## 防除のポイント

- ◆ 被害葉は速やかに取り除く。
- ◆ 発生を認めたら、レーバスフロアブル等を散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、薬害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 褐斑病



被害葉



被害葉(拡大)\*

## 特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア、バッファローなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

## 防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 晩腐病



被害果※

### 特徴

- ◆ 新梢伸長期～収穫期に雨が多いと多発しやすい。
- ◆ デラウェアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きつるなどで越冬する。

### 防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 傘かけや袋かけを行う。
- ◆ 被害果房は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 前年度の発生状況をふまえ、アフエットフロアブル、オンリーワンフロアブル等を予防的に散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 黒とう病



被害果



被害果(拡大)

### 特徴

- ◆ 葉、果実、新梢、巻きヒゲに発病し、大粒系に発生が多い。
- ◆ 枝や果実に黒色の病斑が生じ、果実肥大の不良など品質低下につながる。

### 防除のポイント

- ◆ 雨よけすることで被害が軽減できる。
- ◆ 被害果房や枝は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 5月中旬以降はオンリーワンフロアブル等を予防的に散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## チャノキイロアザミウマ



被害果＊

### 特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

### 防除のポイント

- ◆ コルト顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## フタテンヒメヨコバイ



被害葉＊

### 特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

### 防除のポイント

- ◆ ほ場周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ 発生を認めたら、エクシレルSE等を散布する。

## ハダニ類



カンザワハダニ※

## 特徴

- ◆ 加温機の近くやダクトの先端部等、高温になりやすいところや乾燥条件で発生することが多い。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニオーテフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## みかん

## そうか病



被害果(そうか型病斑)

## 特徴

- ◆ 降雨時間が長いと発病が多い。
- ◆ 葉、果実の表面に、直径1ミリ前後に隆起する「イボ型」や「そうか型」の病斑ができる。
- ◆ 果実の外観が悪くなり、糖が少なく、酸が多くなるなど品質が低下する。

## 防除のポイント

- ◆ 被害葉・被害果は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ チッソ肥料の過用を避ける。
- ◆ 排水、通風を良好にする。

## 黒点病



被害果

## 特徴

- ◆ 梅雨時期など雨が続くと発生が増加する。

## 防除のポイント

- ◆ 伝染源となる枯枝は除去し、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ストロビードライフフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## ※注意！

ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

## ミカンハダニ



被害葉

## 特徴

- ◆ 雨が少ないと発生が多くなりやすい。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)、マイトコーネフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

## ミカンサビダニ



被害果\*

## 特徴

- ◆ 雨が少ないと発生が多くなりやすい。

## 防除のポイント

- ◆ 発生の初期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤等を散布する。

## ※注意！

上記薬剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤に対して薬剤抵抗性が生じている地域では、コテツフロアブル(かんきつ)、ダニエモンフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシの被害果

## 特徴

- ◆ ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)等が加害する。

## 防除のポイント

- ◆ 発生の多いほ場では、防除を徹底する。
- ◆ 幼虫発生期にモスピラン顆粒水溶剤(かんきつ)、トランスフォームフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## 幼虫発生期

ナシマルカイガラムシ: 5月下旬～6月中旬、8月上旬～中旬  
ヤノネカイガラムシ: 5月下旬～6月下旬、8月中旬～9月上旬

## 果樹類

### 果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

#### 特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。
- ◆ ほ場により飛来量が大きく異なる可能性があるため、ほ場内を見まわり発生及び被害状況を確認する。

#### 防除のポイント

- ◆ ほ場全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、カメムシ類に適用のあるスタークル/アルバリン顆粒水溶剤（もも、かんきつ、ぶどう、かきなど）、アディオン乳剤（もも、かんきつ、かきなど）等を散布する。
- ◆ 薄暮期から夜間を中心に活動するため、夕方に薬剤散布を行うと効果的である。
- ◆ スギ林やヒノキ林の隣接ほ場では、被害が多くなる傾向があることから特に飛来状況に留意する。

## 花き

### きく

#### 黒斑病・褐斑病



被害葉\*

#### 特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

#### 防除のポイント

- ◆ 降雨の多い場合に発生が多いので、発生前からダコニール1000等を散布し、予防に努める。
- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、ベンレート水和剤、ストロビーフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

注)ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。  
ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

## アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

## 特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花卉にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉には主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。

※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

## 防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設の開口部に防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 葉の被害に注意し、小発生時の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アフーム乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## その他 注意すべき病害虫

## 水稲

## スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)



成虫



卵塊

## 特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が食害され、欠株になる。成長した稲(5葉期以降)は食害しにくい。
- ◆ 卵は濃いピンク色で、稲の茎や葉の付け根、あぜ板、用水路の壁面などに産卵する。
- ◆ 寿命は2～3年で、多くの個体は2年目の産卵期を終えると寿命を迎える。
- ◆ 低温耐性は強くないが、府内では越冬が可能。

## 防除のポイント

- ◆ 加害時期(田植直後、約20日間まで)にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等の散布や、浅水管理により重点的に防除する。  
注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間湛水状態にし、かけ流しや落水はしない。
- ◆ 加害時期以降は、卵塊を水中にかき落とし(濃いピンク色の卵は水中で窒息死する)、成貝は捕殺して、貝の密度を低くする。
- ◆ ふ化直前の白っぽい卵は逆に水中でもふ化するため、水中に落とさず除去する。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(編目5mm以下)を設置する。

「スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)生態と防除」(令和7年5月発行)もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/r7sukumiringogai-osaka.pdf>

## 野菜：トマト・ミニトマト

### トマトキバガ



府内で誘殺された成虫

#### 特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主にナス科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

#### 防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga\\_osaka.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga_osaka.pdf)

## 果樹：バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

### クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫



成虫

#### 防除のポイント

- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で中華麺～うどん状に固まる)を排出する。6～8月に成虫が羽化する。
- ◆ フラスの発生を見逃さないようにほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)、ベニカカミキリムシエアゾール(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参照ください。

[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka\\_osaka.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf)